

敦煌莫高窟における隋代菩薩像に関する研究

Study of Bodhisattva Images of the Sui Dynasty in Dunhuang Mogao Grottoes

ZHAI JING

1. 序論

(1) 研究背景

千仏洞とも呼ばれる莫高窟は、中国甘粛省敦煌市の東南 25km、鳴沙山の東の断崖に位置し、南北に 1680 メートルに渡って 735 窟が造営された。前秦建元 2 年 (366) から元代まで¹、約千年にわたり、石窟の造営が続けられた。現在まで、大小 492 の窟に約 45000 平方メートルの壁画及び 2000 余体の彩色塑像が保存されている。莫高窟は中国の代表的な仏教石窟群とされ、雲岡石窟、龍門石窟と並び、中国三大石窟の一つと数えられる。1961 年に中華人民共和国の全国重点文物保护单位に、1987 年にユネスコの世界文化遺産に登録された。

西暦 581 年に建国した隋王朝は、北周に廃棄された仏教を復興する政策を採り、「仏教治国策」という政策を展開した²。仏教信仰の隆盛と共に、隋代において仏教美術は著しい発展を遂げた。隋代は 37 年の短期政権だが、敦煌莫高窟で造営された窟の数が非常に多く、重修窟を含めて 100 窟に達している。他の地域と比べ、莫高窟における隋代の塑像や壁画はよく保存され、数も多く、隋時代における仏教美術の統一様式の形成に関する研究に欠かせない存在であるとされてきた。また、莫高窟における隋代窟は北朝の様式を継承し、初唐時期の窟への影響も強く、この過渡的な特徴が指摘されている³。敦煌莫高窟における仏教美術様式の変遷及び統一化の研究に不可欠であると考えられる。

菩薩は仏教において人々を悟りへ導く存在であると同時に、自らも修行者である。釈迦が悟りを開く以前の王子であった時の姿を表す。その特徴は、自由な姿勢と豊富な装飾品である。菩薩像は、信者たちに対して単に信仰や礼拝の対象だけではなく、当時の人々の美意識を理解できると考えられる。そして、莫高窟において造営を担う工匠たちは信者たちの需要を満足するため、菩薩の理想の姿を具現化し、そこに時代の美意識を反映した。それゆえ菩薩像の

研究を通じて、当時の人々の美意識をある程度に明らかにできると考えられる。

(2) 研究目的

そこで、本研究では、莫高窟における隋窟の菩薩像を中心として、現地調査及び資料収集を行った上で、菩薩像の様々な表現を精査し、形式的な特徴だけではなく、それらが反映している各時期の美術様式の変遷について分析を行う。その結果を基に、当時の人々にとって菩薩に対する認識及び美意識の変遷を明らかにすることを目的とする。

(3) 研究方法・先行研究

本研究は、現地考察と文献調査を中心とする。また、天衣や装飾がよく保存された壁画菩薩像を中心に挙げた。現在まで、2 回の現地調査を通じて、図版や文献資料で見られない細部をはっきり観察できることになった。また、莫高窟の内容総録や図版などの公開された資料を中心に文献調査を行った。また、当時の社会背景を、史料から把握し、菩薩像の特徴の変化との関係を考察した。さらに、数字敦煌や敦煌学情報資料庫などのデジタル資料を活用し、文献資料を補充した。

現在まで、莫高窟における隋窟に関する研究は、数多くなされている。全体的内容総録や図版以外に、歴史学や美術史、宗教学などの研究にも膨大な数に達した。これまでの研究では、菩薩像の宝冠や天衣、持物などを対象として、その形式を分類し、それを用いて編年を行ってきた。しかし、様々な表現を通じて古代敦煌の信者や工匠たちが「求める美しさ」及び「表現したかったもの」を明らかにした研究は少ない。本研究では、菩薩像自身の形式だけではなく、それらが反映する当時の人々の菩薩に対する認識及び美意識を明らかにすることを目的とした。そしてこれは、莫高窟の仏教美術研究に新たな方向性を提示する可能性があると考えられる。

さらに、はっきり見られない図版があるため、筆者が模写した図をそばにつけた。

2. 莫高窟における隋第1期窟菩薩像の特徴

(1) 概要と背景

樊錦詩・関友恵・劉玉権は、壁画と塑像が良好に保存されている81窟を隋窟として取り上げ、それらを3期に分け、第1期窟の年代を隋が開皇9年(589)に陳を滅ぼす以前の時期(580-589)とした⁴。この時期の隋王朝は未だ中国を南北統一しておらず、辺境に少数民族との戦争も常に起こっていた⁵。不安定な社会環境により、この時期の莫高窟には、大量に窟を開削することが困難であり、隋第1期窟は僅か7窟しか存在しない。また、敦煌は中原に遠く、戦乱により連絡が途絶えたことがあり、新しい情報の流入は困難だと考えられる。

また、隋第1期窟の中に、明確な紀年を持つ窟は第302窟と第305窟である。第302窟の中心柱北面の題記には「開皇四年六月十一日」と記され、第305窟北壁の龕下部には「開皇五年正月」と記されている^{注1}。第302窟はまた、北朝期に見られなかった須弥山形と成している中心柱が作られた。

本章では、先ず紀年銘を持ち、図版資料がより豊富な第302窟を取りあげ、この窟に描かれた菩薩像の特徴について説明した。そして、隋第1期諸窟の中に、窟内の場所によって壁画菩薩像を分類し、その特徴及びそれらが反映する美意識を考察した。

(2) 隋第1期窟菩薩像の特徴

隋第1期の菩薩像は、やや長い上半身と強い動きが特徴的だと考えられる。身体には、ほぼ細身で三曲法を採り、腰の捻りが目立っている。肉体表現が少なく、腹部に筋肉を示す線が見られる(図1)。腰を横に強く曲げ、そして膝を曲げ、舞い姿のような像が見られる(図2)。着衣式には、天衣は殆ど両肩を覆い、そして身の前に二つのU字形に形成し、両腕にかけて垂れている。そして、手に握られる天衣とX状に交差する天衣も見られるが、数が少ない。下半身の表現が簡単であり、二重に纏う裳はほぼ短く表現され、足首が覗いている。

隋第1期菩薩像の装飾は非常に簡素であるが、菩薩の身分に相応する宝冠や首飾り、腕釧、臂釧、足釧をすべて備えている。X字形の璎珞や文様を刻んだ飾り等の存在が認められるものの、数が極めて少ないため、当時のファッションや流行様式になる可能性が低い。身体の動きに相応し、風にたなびく宝縷や天衣のねじれなどの表現が多く見られ、動勢をいっそう強くなった。

つまり、隋第1期窟菩薩像には、自由な姿勢と身

体の動きを求めることが理解できる。



図1 第302窟・南壁

(数字敦煌 <https://www.e-dunhuang.com/>)



図2 第305窟・西壁

(『中国石窟 敦煌莫高窟2』平凡社)

3. 莫高窟における隋第2期窟菩薩像の特徴

(1) 概要と背景

樊錦詩・関友恵・劉玉権氏の編年により、莫高窟における隋第2期の年代を開皇9年~大業9年(589~613)頃とされた。合計34窟ある。

隋文帝が開皇9年(589)に陳を滅ぼし、南北統一を完成した⁶。その後、文帝は西北に進軍し、遊牧民族の突厥及び吐谷渾に抵抗して反撃を加えた⁷。再び西域に進出し、西域の国々が隋王朝に遣使を送って朝貢を始めた。それらの施策により、辺境の安定を遂げた。そして、大業3年(607)、隋代の第2代皇帝楊広(煬帝)は裴矩を河西地区に派遣し、隋王朝

の西域通商拡大に指導的役割を果たした⁸。大業5年(609)に、煬帝は自ら河西回廊まで巡幸した。また史料を見ると、この時期における河西地区の経済が繁栄していることが理解できる。安定な社会環境及び繁栄な経済により、治国政策の一部とされた仏教信仰も急速な発展を遂げた。開皇9年～大業9年(589～613)において、莫高窟の造営も盛んになった。隋第2期に造営された窟の数が多く、第1期より著しい変化が生じていた。この時期の塑像は、外来情報の流入により、二つの異なる工人系統が存在すると指摘されている⁹。一方、壁画には、作風によって二つのタイプに分けることができることが明らかにされている¹⁰。本研究では特に壁画菩薩像に注目して分析を行い、菩薩像にいかなる形式の変化があったかを明らかにしたい。

本章では、先ず菩薩像の数が多く、図版資料が豊富な第420窟を取りあげ、この窟に描かれた菩薩像の特徴について説明した。そして、隋第2期諸窟の中に、窟内の場所によって壁画菩薩像を分類し、その特徴及び反映する美意識を考察した。また、隋第1期諸窟の菩薩像の特徴と比較し、その変化を明らかにした。

(2) 隋第2期窟菩薩像の特徴

隋第2期窟の菩薩像は頭部が大きく、身体全体の1/6以上を占めている像が見られる。顔立ちには、眉や目、鼻、口は顔の中央に寄り、両頬及びこめかみに小さい円状にぼかしを入れた表現が多い。身体には三曲法を採らなくまっすぐに立っており、あるいは緩やかな三曲法を採り、全体の動きが穏やかにな

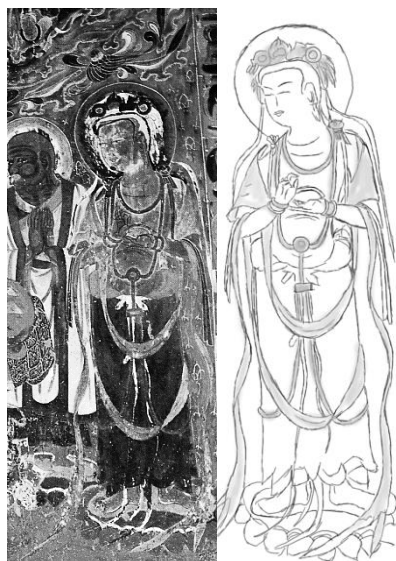


図3 第407窟・東壁

(『中国石窟 敦煌莫高窟2』平凡社)



図4 第427窟・中心柱

(『中国石窟 敦煌莫高窟2』平凡社)

ったことがこの時期の菩薩像にとって特徴的だと考えられる。第1期窟と比べ、少し肉がついた像が出現した(図3)。少し太った身体は全体の安定感を強調する役に立つと考えられる。そして強い動きを帯びた第1期像と比べ、隋第2期菩薩像は誇張を避け、その穏やかな姿はもっと普通の人間のイメージに合うと考えられる。また、隋第2期には、袈裟を着ける特殊な菩薩像以外に、殆ど天衣を纏い、第1期と同じ二つのU字形に形成する着け方を多くに採用する。また上半身に內衣を着ける表現は増えた。下半身の裳の形式について、足首まで裳に覆われる表現が増加し、裾が畳まれて真っ直ぐな裳が流行したことが認められる。足先まで覆う極端的な例も見られる。飾り物には、隋第1期の菩薩像より種類が多くなり、細部まで精緻に表現された。想像の物ではなく、本物を参考して作られたように、写実性が増加した。ただし、第427窟の菩薩像のように動きを強調した天衣(図4)、あるいは腰がとても細く表現され、簡素な飾り物をつけた像も見られる。これらは隋第1期の特徴を部分的に受けたと考えられる。そしてこれは、隋第2期像のもう一つの特徴、多様性を示した。

つまり、隋第2期窟は多様性を持ちながら、写実性が増加し、穏やかな姿で人間のイメージに近づいた菩薩像が描かれた。

4. 莫高窟における隋第3期窟菩薩像の特徴

(1) 概要と背景

敦煌莫高窟における隋第3期に属する石窟は39窟

が現存している。樊錦詩・関友恵・劉玉権の編年により、その年代は初唐にかかり、隋・大業9年～唐・武徳5年（613～622）とされた。

隋王朝の第2代皇帝楊広（煬帝）の施策により、中国の南北を縦に貫いている大運河を建設し、万里の長城を築き、そして隋王朝の版図を拡大するため高句麗征服を試みた¹¹。しかし、これらは庶民たちに負担をかけることとなり、人々に不満を抱かせた。大業9年から、全国に反乱が起こり始め中国全土を巻き込み、敦煌は初唐まで地方勢力に支配されていた。敦煌以外の地域では、歴史上稀に見る多くの戦乱に見舞われたのに対して、敦煌ではそれらよりは状況が落ち着いていた。この時期の莫高窟では、隋第2期から、一定の発展を遂げ、成熟期を迎えた。隋第3期窟は「中原や外来の強い影響を被らなかったことで、初唐のような大幅でかつ実質的な変化を生み出すには至らなかった」も指摘されている¹²。だが、窟の中には、第276窟のように明らかに西安など中原から来たと思われる工匠により描かれた窟も存在しているので、第3期諸窟を敦煌莫高窟のみでの自律的な展開としてしまうことはできない。

隋第3期諸窟において、明確な紀年を持つのは第282窟であり、西壁の発願文に「大業九（613）年七月十一日造訖」と記されている。第282窟は、隋第2期窟と第3期窟の特徴を合わせて所有すると指摘されている。そのため第282窟は、第3期窟開始の年代推定の基準窟とされた。また、第390窟の北壁の題記には、「幽州惣管府」の職名が見られ、この制

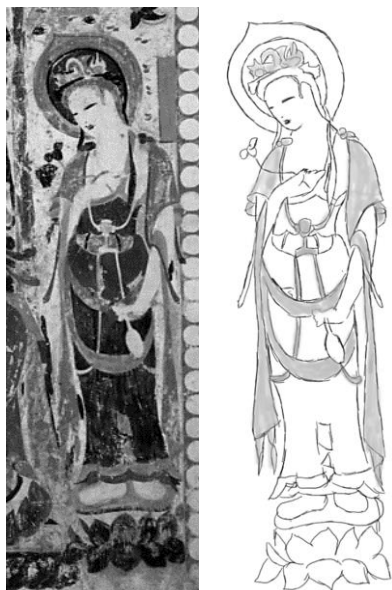


図5 第390窟・北壁

（数字敦煌 <https://www.e-dunhuang.com/>）

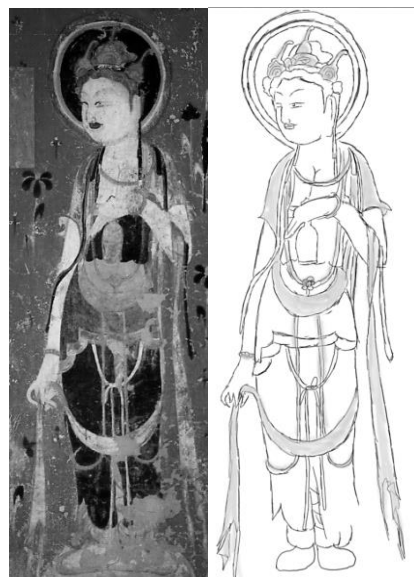


図6 第278窟・西壁

（『中国石窟 敦煌莫高窟2』平凡社）

度が存在する時期は唐武徳初年（618～622）であることから、隋第3期最末期が、初唐時期に入っていたことの根拠とされる。

本章では、先ず第390窟を取りあげ、この窟に描かれた菩薩像の特徴について詳細に説明した。そして、第390窟以外の第3期諸窟の壁画菩薩像を窟内の場所によって分類を行い、その特徴及び反映する美意識を考察した。

（2）隋第3期窟菩薩像の特徴

隋第2期の多様性と異なり、隋第3期の菩薩像はほぼ形式的に統一された。第1期および第2期と比べ、頭髮の表現を重視し、柔らかく膨らんだ髪を宝冠の後ろに宝髻を結う（図6）。菩薩像の宝冠は従来の三面宝冠を基に、細部に様々な形式を発展させ、写実性がいっそう増加した。また、プロポーションを整え、6.5頭身や7頭身の表現がおおく見られる（図5）。上半身より、下半身（足）の長さを強調する。そして、撫で肩の幅が狭く表現され、上半身の量感が少なくなった。隋第2期像のまっすぐな裳と異なり、隋第3期像には下半身の曲線を示したことが多い。撫で肩や臀部の膨らみにより、下半身にボリューム感をつけ、男性より女性の体型に近づき、そして柔らかく、優しい雰囲気が感じられる。また、全体的な肉体表現も少なく、天衣や內衣などの服装で隠されたものが多い。

着衣式や装飾は殆ど統一された。天衣は基本的に

二つのU字形になり、もっと細くなる傾向が認められる。そして両肩から垂れる飾り紐の表現を重視し、天衣と共に腕にかけて垂下する表現が出現した。また、第1期および第2期によく見られる一方の肩を覆う內衣は、第3期に入ると、一本の紐で吊られた內衣に変わった。そして、裳の着け方について、長い裳を二重に纏い、外側の裳を身体の前に打ち合わせて腰部に外側に折り返し、内側の裳を內衣まで持ち上げて紐できつく縛られる着衣式は、隋第3期菩薩像の特徴的な着衣式だが指摘された¹³。また、璎珞は裳を上から抑える表現、および腰紐にかぶさる內衣の布から、第3期像はゆったりした衣着をつけることが認められる。そしてこれも、全体の柔らかさに相応し、緊張感がなく、ややのんびりしたイメージが生まれてきた。さらに、「八」字形の璎珞は第3期の典型的な飾り物として、殆どすべての像につけられる。

5. 時代と共に菩薩像の特徴の変遷

(1) 北周時代後期と隋第1期との比較

第4章では、先ず、隋代の前の北周後期の第301窟を取りあげ、隋第1期との比較分析を行った。隋第1期窟の壁画菩薩像は、菩薩像の頭部が大きく、上半身を長く、下半身を弱く表現した点では、北周後期窟と一致する。しかし、北周の菩薩像は、広い肩幅や腰までの強い括れ、胸部や腹部に筋肉等の表現(図7)により、力強く、頑丈な姿を強調したことが理解できる。隋第1期に入ると、北周の形式を部分的に採用したが、肉体表現は弱くなり、全体的に細身となり、動きも強くなった。着衣式、または装



図7 第301窟・西壁

(数字敦煌 <https://www.e-dunhuang.com/>)



図8 第57窟・北壁

(『中国石窟 敦煌莫高窟3』平凡社)

飾には、北周時代後期と隋第1期は多くの類似点を持っている。だが、北周後期にあまり強調されていない宝繪や天衣のねじれは隋第1期によく見られ、装飾性が強くなったと考えられる。

つまり、隋第1期窟の菩薩像は、北周後期の特徴に連続性を保持した像が見られるが、それと異なるものが多かった。

(2) 隋第3期と唐前期第1期との比較

一方、隋代の後の唐前期第1期窟の第57窟を取りあげ、隋末の第3期の菩薩像との比較分析を行った。唐前期第1期窟の菩薩像(図8)は、長身及び穏やかな姿では隋第3期に類似するが、隋第3期の撫で肩と異なり、肩幅が広くなり、腰部の括れをよく表現した。上半身のボリューム感が増加し、特に肩や胸部にやや太った。宝冠や璎珞等の装飾品を非常に強調し、全体的に多彩な文様をつけ、とても華やかな姿を表した。つまり、唐前期第1期の菩薩像は、姿の安定感や表現の写実性の方面で、隋第3期窟の特徴を保持したが、形式の統一性を失い、多様性と装飾性が大幅に増加した。

6. 結論

(1) まとめ

隋第1期窟は隋代窟の始まりに位置し、北周の形式を部分的に踏襲したが、また新たな展開を示した。力強い筋肉の表現をあまり採用せず、強い動きを持つ細身の表現が特に好まれたことが理解できる。自由で躍動感があふれ、北周時代末の廃仏の時代が過ぎ去り、「仏教治国策」により、新たな時代が始まっ

たことに相応した美意識に変わったと感じられる。

また、隋第2期は最も菩薩像の形式の多様化が認められる時期である。この時期には、強い動勢を帯びた第1期の菩薩像は急速に減少し、緩やかな三曲法を採り、安定感を持つ菩薩像が流行した。だが、統一的な形式はまだ形成されなかった。また、技術の発展により、菩薩像を細部まで写實的に表現できるようになった。新たな時代を迎えた第1期より少し落ち着き、平和で繁栄した時代を迎える人々は安定感を持つ形式を特に好んだことが理解できる。菩薩の姿は徐々に誇張を避け、写實的になり、人間とは隔絶した存在から、人間のような外見をしている存在へと像のイメージが変わっていった。つまり、この時期の人々にとって、人間に近づき、安定感及び現実感がある菩薩像は理想な姿である。

そして、隋第3期は諸形式が統一された時期である。第2期と同様に、動勢が少なく、穏やかな姿から、安定感が生まれてきた。また、頭髪の表現や身体の曲線から、現実感もいっそう増加したと認められる。そして、第2期と比べ、全体的に曲線を多用し、肉体表現が控えめで、身体のかたさを表現した。そしてこれは、女性の体型に近づき、かたさや優しい雰囲気を求める新たな美意識が認められる。そして、唐前期第1期に入ると、装飾を非常に強調し、多彩な文様や豊富な飾り物から、華やかな特徴を菩薩像に加えた。菩薩は隋時代の現実感や安定感を持ち、人間に近くなったが、唐時代にはそれが、多くの飾り物を持つ上層の貴族のようなイメージに展開したと考えられる。

(2) 今後の課題

本論文では、莫高窟における隋窟の壁画菩薩像の形式に重点が置かれて考察し、各時期の変遷及びそれらが反映する美意識の変化に関心を寄せた。しかしながら、言及しなかった塑像菩薩像は、壁画菩薩像と同じ時期でつくられ、それらがどのような特徴を持ったか、あるいは壁画との関連も重要な課題だと考えられる。今後、壁画菩薩像だけではなく、塑像や窟形式、文様などを合わせ、隋窟各時期の特徴を明らかにし、編年の研究も行いたい。また、隋代には、例えば第276窟などのように、明らかに西安など中原地方から来た工匠による像が存在し、中原地方からの直接的な情報流入が、敦煌莫高窟の交渉に大きな影響を与えたと考えられるが、本論ではそれについて詳しく言及することができなかった。今後、隋代の他地域の石窟及び造像との比較を行う

ことで、地域間の交流を注目しながら、研究を進めたい。それらの研究により、隋代莫高窟の諸問題について取り込んでいきたい。

注

- 1) 305窟は、南壁の龕下部に「開皇四年」と記され、北壁の龕下部に「開皇五年」と「大業元年」と記されている。

引用文献

- 1) 李懷讓：重修莫高窟仏龕碑、唐代則天武后聖歷元年（698）
- 2) 浅田守：隋代仏教政策に関する研究、龍谷大学大学院研究紀要人文科学 9、pp. 136-138、1988
- 3) 樊錦詩・関友恵・劉玉権：莫高窟隋代石窟の時代区分、中国石窟 敦煌莫高窟二、p. 186、1981
- 4) 樊錦詩・関友恵・劉玉権：莫高窟隋代石窟の時代区分、中国石窟 敦煌莫高窟二、pp. 186-205、1981
- 5) 7) 王力平：隋朝の边疆経略、中国边疆史地研究、pp. 1-14、1999
- 6) 魏徵・長孫無忌：隋書・高祖上、巻1、唐
- 8) 魏徵・長孫無忌：隋書・裴矩伝、巻67、唐
- 9) 八木春生：敦煌莫高窟隋窟造像についての一考察—塑像を中心として—、中国考古学 (9)、pp. 133-154、2009
- 10) 樊錦詩・関友恵・劉玉権：莫高窟隋代石窟の時代区分、中国石窟 敦煌莫高窟二、p. 194、1981
- 11) 魏徵・長孫無忌：隋書・煬帝下、巻4、唐
- 12) 樊錦詩・関友恵・劉玉権：莫高窟隋代石窟の時代区分、中国石窟 敦煌莫高窟二、p. 203、1981
- 13) 八木春生：中国仏教造像の変容—南北朝後期及び隋時代、p. 352、法蔵館、2013